

大学院生の試行カウンセリングにおける 作業同盟評定の試み

山村 崇尚¹⁾, 藤原 美聡²⁾, 尹 智成³⁾, 兒玉 憲一⁴⁾

キーワード：試行カウンセリング, 作業同盟, 大学院生

An exploratory study to measure the working alliance in trial counseling by graduate students

Takanao YAMAMURA¹⁾, Misato FUJIHARA²⁾, Jisoeng YOON³⁾, Kenichi KODAMA⁴⁾

Key words: trial counseling, working alliance, graduate student

I. 問題と目的

臨床心理士養成大学院（以下、大学院と略記）では、大学院生がカウンセリングの訓練を受ける方法の1つとして試行カウンセリングが重要な役割を果たしている。試行カウンセリングとは、カウンセラー（以下、Coと略記）を目指す大学院生が、クライアント（以下、Clと略記）役を依頼したボランティア大学生の協力を得て、本格的な臨床心理面接に移行する前に短期間のカウンセリング面接を実施する訓練方法である¹⁾。試行カウンセリングの目的は4つある¹⁾。第1に、カウンセリングの基礎的な傾聴技法の習得である。第2に、ケースマネージメントの習得である。Cl役を依頼した大学生と日時を約束し、合計5回の面接を継続して実施する。面接構造を意識し、維持する役割を学習する。第3に、毎回の面接内容を

を記録して保管するなどの実践的な学習である。第4に、毎回の面接終了後にスーパーヴィジョン（以下、SVと略記）を受けることである。Co自身がスーパーヴァイザー（以下、SVEと略記）になる体験から、SVという訓練方法を体験的に学習する。また、SVEとしての体験をClの理解に役立てる方法を学習する。このような訓練方法では、CoはCl役を依頼した大学生との間に信頼関係を速やかに形成することを求められる。

さて、カウンセリングや心理療法（以下、心理療法と略記）場面における二者関係に関する概念として、作業同盟 working alliance がある。作業同盟とは、CoとClの二者間における協同と情緒的絆であり²⁾、幅広い心理療法に共通する関係性である³⁾。作業同盟を測定する尺度は30種類以上あり⁴⁾多義的であるため、本研究ではBordin³⁾に基づき、作業同盟とは、CoとClの二者間にお

1) 広島大学大学院医歯薬保健学研究科医歯薬学専攻
2) JA尾道総合病院
3) 弓削商船高等専門学校
4) 広島大学大学院教育学研究科

1) Graduate School of Biomedical and Health Sciences, Hiroshima University
2) Onomichi General Hospital
3) Yuge National College of Maritime Technology
4) Graduate School of Education, Hiroshima University

る相互理解, 目標の合意, 課題の一致からなる概念と定義した。Bordin³⁾に基づく作業同盟を測定する代表的な尺度は, Working Alliance Inventory (以下, WAIと略記)である⁵⁾。本尺度には, CI 評定版 Client form (以下, WAI-Cと略記)に加えて, Co 評定版 Therapist form (以下, WAI-Tと略記), 面接に関与しない第三者が評定を行う第三者評定版 Observer form (以下, WAI-Oと略記)⁶⁾の3種類があり, 3尺度を用いることでより多面的に作業同盟を測定できる。

わが国では, 訓練面接に参加したボランティア大学生 CI と大学院生 Co を対象として, 前述した尺度のうち CI 評定版と Co 評定版を用いた研究が行われてきた。そこでは, 主に作業同盟と面接評価の相関関係が報告されてきた。具体的には, ①訓練面接を重ねるごとに, Co と CI が評定する作業同盟の質は高まり, ②作業同盟の質を高く評定する Co は, 訓練面接の質も高く評定する傾向にあり, ③作業同盟の質を高く評定する CI は, 訓練面接の肯定感, 深さ, なめらかさも高く評定する傾向にあり, ④ Co が初回面接時に面接の構造化を意図する発言を行うほど, CI は作業同盟の質を高く評定することが報告された⁷⁾。また, 計2回の訓練面接に参加した Co と CI 7組を対象とした調査では, ①訓練面接の初回・第2回面接時に, 面接において問題解決への取り組みがなされていると感じた CI ほど, 作業同盟の質を高く評定し⁸⁾, 初回面接時の CI に問題解決にむけた取り組みが見られたと感じた Co ほど, 作業同盟の質を高く評定することも報告された⁹⁾。

上述の訓練面接は問題解決に重点をおいていたが, 試行カウンセリングは問題解決ではなく傾聴技法の習得を目的とする。従って, 試行カウンセリングに参加したボランティア CI と大学院生 Co を対象として作業同盟に関する同様の研究が必要と思われる。そこで本研究では, 試行カウンセリング場面における作業同盟の測定を試みることを目的とした。ただし, 試行カウンセリング場면을対象とする研究を実施する場合, 全5回の面接について作業同盟の評定を行うことは, Co, CI, 評定者に負担が伴うため難しい。また, 全5回の

面接終了前に CI に評定をお願いすれば, CI は Co 以外の大学院生に面接室の話が伝わることを懸念して試行カウンセリングに影響が及ぶ可能性がある。そこで本研究では, 試行カウンセリング初回の作業同盟を第三者評定で行い, 5回面接終了後の作業同盟の CI 評定との関連を検討することを第1の目的とした。また, 事例分析法に基づき, 試行カウンセリングにおける作業同盟評定を教育的に活用する方法を検討することを第2の目的とした。

II. 方法

1. 調査対象

X年及びX+1年に, A大学院の博士課程前期1年生対象の試行カウンセリングに参加した大学院生 Co とボランティア学生 CI の31組計62名を対象者とした。

2. 調査手続きと倫理的配慮

試行カウンセリングは以下の要領で行われた。Co は, 学部生 CI を募集し, 募集に応じた CI 候補者には, 以下の説明が行われた。試行カウンセリングは Co を養成するために実施される訓練面接である。Co が基本的傾聴技法¹⁰⁾を習得することを目的としており, 実際の心理療法とは異なる。訓練のために面接内容を録音し, 個人が特定されないよう固有名詞を全て削除した上で臨床心理士のスーパーヴァイザー (以下, SVR と略記) による指導を受ける。面接は毎週1回50分間, 合計5回実施される。CI 候補者が, Co の知人あるいは深い悩みを抱えている場合は参加を見合わせてもらう。以上の点に同意が得られた場合に CI を依頼し, 面接では悩みや問題に限らず話したいことを話すよう求められた。

このような試行カウンセリングに参加する Co に, 以下の要領で倫理的配慮を行うことを伝えて調査への協力を依頼した。Co に研究計画の概要を書面で配布した上で, 口頭による説明を行った。また, Co に CI 用封筒 (調査依頼書, 質問紙, 返信用封筒を同封) を配布し, 試行カウンセリングの最終回が終了した後で CI に渡すよう依頼し

た。その際、調査者がCIに直接調査依頼を行うとCIの匿名性が守られないため、Coに封筒を渡してもらう必要があることを説明した。さらに、Coが調査者ではないことをCIに理解してもらうため、封筒を手渡す際には「試行カウンセリングの研究を行っている院生から、封筒をお渡しするよう依頼された」と伝えるよう依頼した。封筒の中の質問紙は、後日郵送により回収された。質問紙の回答をもってCIの参加同意とした。

調査協力の同意が得られたCIの担当Coには、第三者評定で使用する資料として、CIの個人情報保護のために固有名詞を全て削除したSV用の資料のうち、初回面接の逐語記録と録音データの提供を依頼した。その際、CIだけではなくCoのプライバシーも保護するために必要な部分は、適宜削除するよう依頼した。資料の提供をもってCoの調査協力が同意されたとした。また、協力の得られたCoには謝礼を手渡した。

3. CI用質問紙の構成

1) フェイス・シート

性別、年齢、担当Co名。第三者評定で使用する資料の提供を依頼する必要があったため、担当Co名の記入を求めた。その際、CIの不安を減少させるため、回答内容はCoに伝わらないと明記した。

2) 試行カウンセリング用満足度質問項目

CIの試行カウンセリングに対する満足度を測定する質問項目（以下、満足度項目と略記）。試行カウンセリングに参加したCIの感想¹¹⁾を基に選出した22項目。全体的満足度（3項目、例「試行カウンセリングに満足している」）、Coの態度（3項目、例「カウンセラーの態度は、話しやすい態度だった」）、Coの話を聞き方（4項目、例「カウンセラーは、上手に話を聞いてくれたので、話しやすかった」）、Coへの協力意思（2項目、例「カウンセラーの勉強の役に立ててよかった」）、試行カウンセリングの事前説明（2項目、例「試行カウンセリングに関する事前の説明が足りなかった」）、面接室（2項目、例「試行カウンセリングの部屋は、快適だった」）、試行カウンセリングの

面接時間・回数（3項目、例「試行カウンセリングの長さは、ちょうど良かった」）、試行カウンセリングへの期待（3項目、例「試行カウンセリングは、思っていたカウンセリングの通りだったので、満足した」）の8下位項目からなる。CIには、試行カウンセリング終了後に各項目があてはまる程度を“1. 全くそう思わない”から“7. 非常にそう思う”までの7件法で回答してもらった。得点が高いほど試行カウンセリングに対する満足度が高いことを示す。

3) CI評定版試行カウンセリング作業同盟質問項目

試行カウンセリング場面におけるCoとCI二者間の作業同盟をCIが評定する質問項目（以下、CI版作業同盟質問項目と略記）。WAI-C¹²⁾及び治療同盟尺度クライエント版⁷⁾を試行カウンセリング用に改変し、回答するCIの負担を減らすため一部の項目を削除した24項目。目標の合意（8項目、例「カウンセラーと私は、お互いに一致した目標に向かって試行カウンセリングをしている」）、課題の一致（8項目、例「カウンセラーと私は、試行カウンセリングで何をしなければいけないかということについて、同じ考えである」）、絆の形成（8項目、例「カウンセラーと私は、お互いに信頼しあっている」）の3下位項目。ここで、試行カウンセリングにおける「目標」は、Coが基本的傾聴技法を習得すること、Coの「課題」は基本的傾聴技法を習得するためにCIの話を傾聴すること、CIの「課題」は悩みや問題に限らず話したいことを話すこととした。ただし、試行カウンセリングではCIが特に悩みを話したいこともあるため、各下位項目には悩みや問題の改善に関する項目も含まれる。試行カウンセリング終了後に各項目について“1. 全くなかった”から“7. いつもそうだった”までの7件法で回答してもらった。得点が高いほど、試行カウンセリングにおける二者間の作業同盟を高く評価したことを示す。

4. 第三者評定の手続き

1) 第三者評定版試行カウンセリング作業同盟質問項目

試行カウンセリングにおける Co と CI 間の作業同盟を第三者が評定するための質問項目(以下、第三者版作業同盟質問項目と略記)。WAI-O⁶⁾を翻訳し試行カウンセリング用に改変した36項目(表1)。目標の合意(12項目)、課題の一致(12項目)、絆の形成(12項目)の3下位項目。CI版作業同盟質問項目と同様の理由で、各下位項目には悩みや問題の改善に関する項目も含まれる。試行カウンセリングの前半10分および後半10分の逐語記録を見ながら録音を聞いた後で、各項目について“1. 全くなかった”から“7. いつもそうだった”までの7件法で回答を求めた。得点が高いほど試行カウンセリングにおける二者間の作業同盟を高く評価したことを示す。

2) 評定者及び評定方法

評定は、大学院博士課程前期に臨床心理学を専攻し、修了後1年未満の心理士3名が合議しながら行った。評定者はカウンセリング経験が浅く評定結果が大きく異なる可能性が考えられたため、合議しながら評定を行った。合議に伴う評定者の負担を軽減するため、評定は前半10分及び後半10分の逐語記録及び録音データを対象とした。その際、各事例について評定者からコメントを得た。

5. 基本的傾聴技法の評定

試行カウンセリング中の Co の基本的傾聴技法の使用頻度を評定するため、調査者の1人が各 Co の発言のうちマイクロ技法¹³⁾の基本的かかわり技法7項目の出現頻度を算出した。評定は、作業同盟の第三者評定と対応させるため、試行カウンセリング初回面接の逐語記録及び録音データの提供が得られた Co の前半10分および後半10分を対象とした。

6. 事例分析法

第三者版及び CI 版の作業同盟質問項目得点の平均値によって高低に分け、全事例を高高群、高低群、低高群、低低群の4群に分け、各群の事例

表1 第三者評定版作業同盟質問項目

番号	項目内容
目標の合意	
3 ^{a)}	クライアントとカウンセラーの間で、試行カウンセリングから得られるものについての懸念がある。
6	試行カウンセリングにおけるクライアントの目標について、クライアントとカウンセラーの間で共通の認識がある。
9 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングの目的を明確にしたいと思っている。
10 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングの目標について、意見が一致していない。
12 ^{a)}	クライアントとカウンセラーには、試行カウンセリングで達成しようとしていることについて、疑問や理解不足がある。
14	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングの目標は、クライアントにとっても重要であるという互いの認識がある。
22	クライアントとカウンセラーは、目標を合意したうえで試行カウンセリングを行っている。
25	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングの結果、クライアントがどのように変わるか明確なイメージがある。
27 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、クライアントが抱えている問題についての考えが異なっている。
30	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングの目標を協同して決めている。
32	クライアントとカウンセラーは、クライアントがどのように変わればよいか、十分理解を深めることができた。
34 ^{a)}	クライアントは、試行カウンセリングに何を期待すればよいか、わからない。
課題の一致	
2	クライアントとカウンセラーは、クライアントの状況を改善するためにはどのようなステップを踏めばよいか、意見が一致している。
4	試行カウンセリングの有用性について、クライアントとカウンセラーの意見が一致している(有用性の例:クライアントは、自信の問題に対する新しい見方を見つづつある)。
7 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングで行っていることについて当惑している。
11 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングでの時間の使いかたは効果的ではない、と感じている。
13	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングでクライアントが果たすべき責任について、意見が一致している。
15 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングで彼らが行っていることは、クライアントの関心事と関係がない、と感じている。
16	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングで彼らが行っていることは、クライアントが変わっていく上での助けになるという認識で一致している。
18	クライアントとカウンセラーは、カウンセラーがクライアントに行ってほしいことが明確である。
24	クライアントとカウンセラーは、クライアントが何に取り組むことが大切か、意見が一致している。
31 ^{a)}	クライアントは、試行カウンセリングで行うように求められていることについて、不満を感じている。
33 ^{a)}	クライアントは、試行カウンセリングの経過が分かりにくいと感じている。
35	クライアントは、試行カウンセリングの方法はクライアントにとって良い方法だと思っている。
絆の形成	
1 ^{a)}	クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングの関係に不快感を抱いている。
5	クライアントとカウンセラーは、互いによく理解し合っている。
8	クライアントとカウンセラーは、互いに好感を抱きあっている。
17	クライアントは、カウンセラーがクライアントの幸せを心から願っていると感じている。
19	クライアントとカウンセラーは、互いに尊敬しあっている。
20 ^{a)}	クライアントは、カウンセラーがクライアントに対する自分の気持ちを必ずしも素直には受け入れていないと感じている。
21	クライアントは、カウンセラーの援助能力を信頼できている。
23	クライアントは、カウンセラーがクライアントを1人の人として尊重してくれていると感じている。
26	クライアントとカウンセラーは、互いに信頼し合っている。
28	クライアントとカウンセラーは、彼らの関係が重要であると思っている。
29 ^{a)}	クライアントは、もし自分が間違ったことを言ったり行ったりすればカウンセラーは試行カウンセリングをやめてしまうのではないかと恐れている。
36	クライアントは、カウンセラーがよく思わないことを自分がしても、カウンセラーは自分を尊重してくれるだろうと感じている。

^{a)}逆転項目を示す。

表2 満足度及び CI 版作業同盟の項目全体得点及び下位項目の平均値 (SD) 及び α 係数 (N = 21)

質問項目及び下位項目	平均値 (SD)	α
満足度質問項目	5.45 (1.02)	.92
全体的満足度	5.63 (1.04)	.79
「試行カウンセリングに満足している」		
Co の話の聞き方	5.15 (1.28)	.87
「カウンセラーは、上手に話を聞いてくれたので、話しやすかった」		
面接時間・回数	5.55 (1.08)	.79
「試行カウンセリングの長さは、ちょうど良かった」		
CL 版作業同盟質問項目	5.07 (0.75)	.90
目標の合意	4.71 (0.97)	.76
「カウンセラーと私は、お互いに一致した目標に向かって試行カウンセリングをしている」		
課題の一致	5.31 (0.75)	.75
「カウンセラーと私は、試行カウンセリングで何をしなければいけないかということについて、同じ意見である」		
絆の形成	5.19 (0.82)	.85
「カウンセラーと私は、お互いに信頼しあっている」		
第三者版作業同盟質問項目	4.91 (0.60)	.96
目標の合意	4.58 (0.49)	.79
「試行カウンセリングにおけるクライアントの目標について、クライアントとカウンセラーの間で共通の認識がある」		
課題の一致	5.08 (0.69)	.90
「クライアントとカウンセラーは、試行カウンセリングでクライアントが果たすべき責任について、意見が一致している」		
絆の形成	5.07 (0.71)	.95
「クライアントとカウンセラーは、互いに信頼し合っている」		

(注) 「」内には下位項目の例を示した。

について作業同盟評定を教育的にいかに関活用するかという観点から考察した。

III. 結果

1. 有効回答数

回答のあった CI22名 (71.0%) のうち、欠損値のあった1名を除き21名を有効回答とした (有効回答率67.8%)。男性6名、女性15名。平均年齢20.3歳、SD = 1.9。

2. CI 版作業同盟と満足度の関連

まず、CI 版作業同盟質問項目及び満足度質問項目の項目全体得点及び下位項目得点について内的一貫性を検討するため Chronbach の α 係数を算出した。 α 係数が .70未満の満足度質問項目の下位項目「Co の態度」、「Co への協力意思」、試行カウンセリングの「事前説明」、「面接室」、試行カウンセリングへの「期待」は分析から除いた。両質問項目の項目全体得点及び下位項目得点の平均値、標準偏差、 α 係数を表2に示した。満足

度質問項目の下位項目では、「全体的満足度」、「Co の話の聞き方」、「面接時間・回数」では十分な内的一貫性が認められた ($\alpha = .79-.87$)。

次に、CI が評定する作業同盟と満足度の関連を検討するため、両質問項目全体得点及び下位項目間のスピアマンの順位相関係数を算出した (表3)。その結果、CI 版作業同盟質問項目全体得点と満足度質問項目全体得点及び3下位項目得点との間に強い相関が認められた ($r_s = .73-.83, p < .01$)。下位項目ごとでは、「目標の合意」得点は、満足度質問項目全体得点及び3下位項目得点との間に強い相関が認められた ($r_s = .73-.83, p < .01$)。「課題の一致」得点は、満足度質問項目全体得点及び「話の聞き方」得点との間に強い相関 ($r_s = .72, .74, p < .01$)、「全体的満足度」得点及び「時間帯・回数」得点間に中程度の相関が認められた ($r_s = .60-.63, p < .01$)。また、「絆の形成」得点は、満足度質問項目全体得点及び3下位項目得点との間に中程度の相関が認められた ($r_s = .51-.56, p < .05$)。

表3 満足度、CI版・第三者版作業同盟の質問項目全体及び下位項目間の順位相関行列 (N=21)

質問項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 満足度質問項目	—	.85**	.94**	.89**	.83**	.83**	.72**	.56**	.10	-.02	.18	-.02
2. 全体的満足度		—	.68**	.60**	.73**	.73**	.60**	.55**	-.01	-.18	.04	-.11
3. 話の聞き方			—	.85**	.80**	.79**	.74**	.51*	.13	.04	.21	.04
4. 時間帯・回数				—	.77**	.74**	.67**	.56**	.26	.22	.35	.12
5. 作業同盟質問項目 CI 版					—	.89**	.93**	.81**	.05	-.04	.07	-.04
6. 目標の合意						—	.85**	.56**	-.09	-.18	-.09	-.13
7. 課題の一致							—	.59**	.07	-.01	.10	-.01
8. 絆の形成								—	.11	.08	.10	.05
9. 作業同盟質問項目 第三者版									—	.91**	.94**	.74**
10. 目標の合意										—	.93**	.74**
11. 課題の一致											—	.74**
12. 絆の形成												—

(注1) スピアマンの順位相関係数を示した。
 (注2) 全て片側検定の結果を示した。
 * $p<.01$, ** $p<.05$

3. 第三者版作業同盟とCI版作業同盟及び満足度の関連

第三者版作業同盟質問項目の項目得点及び各下位項目得点の平均値, SD, α 係数を表2に示した。質問項目全体及び下位項目では, 十分な内的一貫性が認められた ($\alpha = .79-.95$)。

次に, 第三者が評定する初回面接時の作業同盟と, CIが終了後に評定する作業同盟及び満足度の関連を検討するため, 項目全体得点及び下位項目得点間のスピアマンの順位相関係数を算出した(表3)。その結果, 第三者版作業同盟質問全体項目得点及び「目標の合意」得点と、「時間帯・回数」得点の間に弱い相関が認められた ($r_s = .26, .22$)。「課題の一致」得点と「話の聞き方」得点 ($r_s = .21$)、「時間帯・回数」得点 ($r_s = .35$) との間に弱い相関が認められた。「絆の形成」得点は, CI評定版の下位項目得点との間に相関は認められなかった。

4. 傾聴技法の使用頻度と, 第三者版及びCI版作業同盟, 満足度の関連

すべてのCo発言における基本的傾聴技法の平均使用回数は, 多い順に以下のとおりであった(表4)。反復14.2回, 閉ざされた質問12.2回, いいかえ10.1回, 最小限の最小限のはげまし7.3回, 開かれた質問7.1回, 感情の反映5.5回, 要約0.4回。各技法の使用頻度と作業同盟の関連を検討するため, スピアマンの順位相関係数を算出した(表5)。

その結果, 第1に満足度質問項目では, 項目全体得点と「いいかえ」「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.35, -.29$)。「全体的満足度」得点と「最小限のはげまし」「感情の反映」の間に弱い正の相関 ($r_s = .28, .29$), 「いいかえ」「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.22, -.27$)。下位項目「Coの話の聞き方」と「いいかえ」「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.34, -.40$)。

第2に, CI版作業同盟質問項目では, 項目全体得点と「いいかえ」「反復」の間に弱い正の相関 ($r_s = .32, .38$), 「閉ざされた質問」「いいかえ」「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.23, -.39$)。「目標の合意」得点と「閉ざされた質問」

表4 基本的傾聴技法の平均使用頻度 (N=21)

基本的傾聴技法	概要	使用頻度
閉ざされた質問	クライアントの応答が限定されていて, “はい” “いいえ” または 1 語で答えられる質問 「例: 部活動をしていますか」	12.2
開かれた質問	クライアントの自由な応答を促すような質問で, “はい” “いいえ” または 1 語で答えられないような質問 「例: 部活動の調子はいかがですか」	7.1
最小限のはげまし	クライアントの応答を促す発言 「例: ええ, それで?」	7.3
いいかえ	クライアントの発言をカウンセラーの言葉で言いかえること	10.1
反復	クライアントの発言を繰り返して伝えること	14.2
感情の反映	クライアントの語る感情を伝えること 「例: とても楽しかったのですね」	5.5
要約	クライアントの発言を要約して伝えること	0.4

表5 基本的傾聴技法の使用頻度と、各質問項目全体得点及び下位項目間の順位相関行列 (N =21)

	基本的傾聴技法						
	閉ざされた質問	開かれた質問	最小限のはげまし	いいかえ	反復	感情の反映	要約
満足度質問項目	-0.06	.09	.02	-0.35	-0.06	.13	-0.29
全体的満足度	-0.13	-0.07	.28	-0.22	-0.01	.29	-0.27
Coの話の聞き方	.03	.16	.02	-0.34	-0.03	.04	-0.40
時間帯及び回数	-0.13	.08	-0.21	-0.24	.03	.15	-0.16
作業同盟質問項目							
CI版	-0.30	-0.17	.32	-0.23	.38	.15	-0.39
目標の合意 CL	-0.25	-0.11	.15	-0.36	.12	.12	-0.24
課題の一致 CL	-0.44*	-0.31	.37	-0.26	.40	-0.05	-0.44*
絆の形成 CL	-0.11	-0.02	.32	-0.06	.50*	.24	-0.33
作業同盟質問項目							
第三者版	-0.07	-0.06	-0.12	.45*	.21	.27	-0.25
目標の合意 0	-0.21	-0.02	-0.19	.38	.27	.12	-0.19
課題の一致 0	-0.21	-0.01	-0.13	.30	.23	.27	-0.29
絆の形成 0	-0.09	-0.13	-0.06	.59**	.21	.34	-0.12

(注1) スピアマンの順位相関係数を示した。

(注2) 全て片側検定の結果を示した。

**p<.01, *p<.05

「いいかえ」「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.24, -.36$)。「課題の一致」得点と「最小限のはげまし」「反復」の間には弱い正の相関 ($r_s = .20, .40$)、「閉ざされた質問」「要約」の間には中程度の負の相関 ($r_s = -.44, p < .05$)、「開かれた質問」「いいかえ」の間には弱い負の相関が認められた ($r_s = -.31, -.26$)。「絆の形成」得点と「反復」の間には中程度の正の相関 ($r_s = .50, p < .05$)、「最小限のはげまし」「感情の反映」の間に弱い正の相関 ($r_s = .32, .24$)、「要約」の間には弱い負の相関が認められた ($r_s = -.33$)。

第3に、第三者版作業同盟質問項目では、項目全体得点と「いいかえ」の間に中程度の正の相関 ($r_s = .45, p < .05$)、「反復」「感情の反映」の間に弱い正の相関 ($r_s = .21, .27$)、「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.25$)。「目標の合意」得点と「いいかえ」「反復」の間に弱い正の相関 ($r_s = .38, .27$)、「閉ざされた質問」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.21$)。「課題の一致」得点と「いいかえ」「反復」「感情の反映」の間に弱い正の相関 ($r_s = .23-.30$)、「閉ざされた質問」「要約」の間に弱い負の相関が認められた ($r_s = -.21, -.29$)。また、「絆の形成」得点と「いいかえ」の間に中程度の正の相関 ($r_s = .59, p < .01$)、「反復」「感情の反映」の間に弱い正の相関が認められた ($r_s = .21, .34$)。

5. 第三者版及びCI版作業同盟による事例の類型化

2つの作業同盟質問項目の項目全体得点及び下位項目得点の組み合わせで、事例を、高高群、高低群、低高群、低低群の4群に分けた。各群から、以下の4事例を分析対象とした(図1)。

高高群の事例Aは、第三者版及びCI版の作業同盟質問項目(以下、第三者版、CI版と略記)の項目全体得点及び下位項目得点がいずれも平均値より高い事例であった。具体的には、第三者版の項目全体得点は5.9点、下位項目「目標の合意」5.1点、「課題の一致」6.0点、「絆の形成」5.9点であった。面接終了後のCI版の項目全体得点は6.2点、下位項目「目標の合意」6.1点、「課題の一致」6.4点、「絆の形成」6.1点であった。また、事例Aの傾聴技法の評定を行った結果、初回面接時の前半・後半各10分におけるCoの発言回数は61回であった。そのうち、「反復」が24回、「いいかえ」が10回、「最小限のはげまし」が9回、「感情の反映」が6回、「閉ざされた質問」が5回使用された。

高低群の事例Bは、第三者版の項目全体得点及び下位項目が平均値よりもやや高いものの、面接終了後のCI版の項目全体得点及び下位項目が平均値を下回った事例であった。具体的には、第三者版の項目全体得点は5.4点、下位項目「目標の

合意」5.0点,「課題の一致」5.7点,「絆の形成」5.6点であった。CI版の項目全体得点は4.1点,下位項目「目標の合意」4.1点,「課題の一致」4.8点,「絆の形成」3.4点であった。また,事例Bの傾聴技法の評定を行った結果,Coの発言回数は37回であった。そのうち,「閉ざされた質問」が8回,「いいかえ」が7回,「感情の反映」が5回,「開かれた質問」および「反復」が5回使用された。

低高群の事例Cは,第三者版の項目全体得点及び下位項目は平均値よりも低い,CI版の項目全体得点及び下位項目は平均値よりも高い事例であった。具体的には,第三者版の項目全体得点は

4.1点,下位項目「目標の合意」3.9点,「課題の一致」4.4点,「絆の形成」4.1点であった。CI版の項目全体得点は5.9点,下位項目「目標の合意」5.6点,「課題の一致」5.8点,「絆の形成」6.3点であった。また,事例Cの傾聴技法の評定を行った結果,Coの発言回数は75回であった。そのうち,「閉ざされた質問」,「開かれた質問」が16回,「最小限のはげまし」が13回,「反復」が10回,「いいかえ」が5回,「感情の反映」が3回使用された。

低低群の事例Dは,両作業同盟質問項目全体得点及び下位項目がいずれも平均値よりも低い事例であった。具体的には,第三者版の項目全体得点

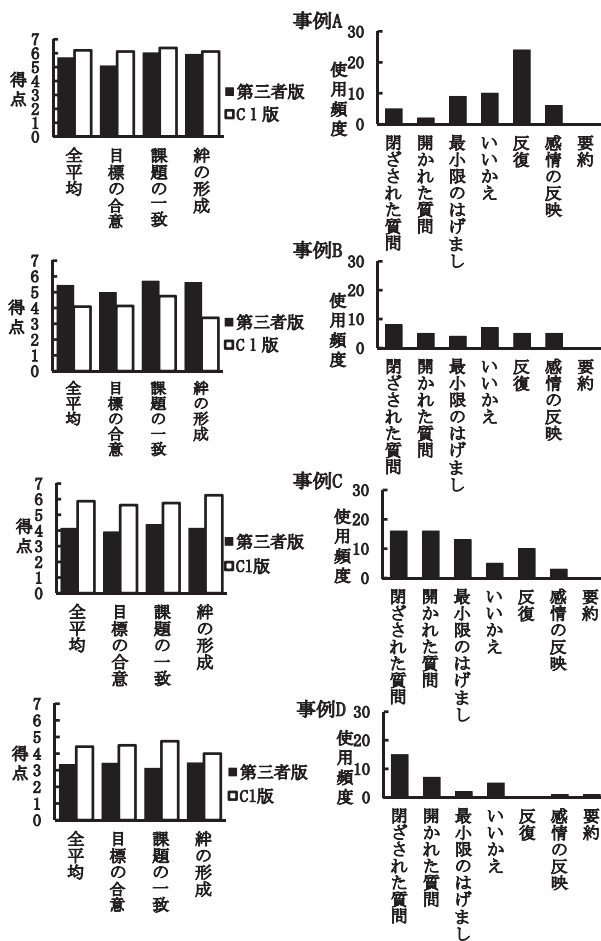


図1 4事例の作業同盟質問項目得点と基本的傾聴技法の評定結果

は3.3点、下位項目「目標の合意」3.4点、「課題の一致」3.1点、「絆の形成」3.4点で全体あった。CI版の項目全体得点は4.4点、下位項目「目標の合意」4.5点、「課題の一致」4.8点、「絆の形成」4点であった。また、事例Dの傾聴技法の評定を行った結果、初回面接時のCo発言回数は39回であった。そのうち、「閉ざされた質問」が15回、「開かれた質問」が7回、「いいえ」が5回、「最小限のはげまし」が2回使用された。

IV. 考 察

1. 作業同盟の第三者評定とCI評定及び面接満足度の関連

本研究の第1の目的は、試行カウンセリング場面を対象として、第三者が評定する初回面接時の作業同盟（以下、第三者版）とCIが評定する面接終了後の作業同盟（以下、CI版）の関連を検討することであった。

まず、第三者版、CI版、満足度質問項目の内的一貫性の検討を行った。その結果、第三者版、CI版の項目全体得点及び下位項目ではChronbachの α 係数が.70以上を示し、内的一貫性が認められたが、満足度質問項目の5下位項目では α 係数が.70以下で内的一貫性が認められなかった。満足度質問項目は、その妥当性、信頼性を今後再検討する必要がある。

次に、第三者版とCI版の関連について検討を行った結果、2つの質問項目の全体得点及び下位項目の間には、相関関係が認められなかった。ただ、この結果をもって、初回の第三者版の結果は、5回面接終了後のCI版の結果を予測できないとは結論づけられない。なぜならば、以下の2つの問題がある。まず、第三者版とCI版で測定される作業同盟が異なるのではないかという問題である。心理療法の同じセッションを評定してもWAI-OとWAI-Cの間に有意な相関が認められない研究^{6), 14), 15)}があり、そこではCIと評定者間で治療目標等の見解が一致していない場合が多く作業同盟の評価も異なるとしているが、同様のことが言えるかもしれない。試行カウンセリングで

も、同じセッションで第三者版とCI版で測定された作業同盟の異同を検討する必要がある。もうひとつは、異なるセッションでも作業同盟が一環しているかという問題である。とくに、本研究のような試行カウンセリングでは、SVの影響でわずか5回の間でもCoの面接態度が大きく変化する場合が多く、それに伴い作業同盟の質が初回と5回で大きく変化する可能性が考えられる。したがって、初回と5回後に、第三者版とCI版が測定され、それぞれの作業同盟の変化やそれに関連する要因が検討される必要がある。

第三者版及びCI版とCIの面接満足度の関連についても検討を行った結果、初回の第三者版の「CoとCIの間で課題が一致している」という項目と、満足度の「Coの話の聞き方を高く評価する」項目に弱い相関が見られたが、その他の下位項目間では相関は認められなかった。この結果についても、上述したように測定者や測定時期が異なるという問題がある。今後は、初回と5回後に第三者版と満足度を測定して、相互の関連を詳細に検討する必要がある。その点、CI版と満足度は同じ測定者が同じ時期に測定しているため、検討に値する。CI版と満足度の間には、全ての下位項目間に中程度から強い相関が認められた。したがって、作業同盟の質が良好であったと感じるCIほど、高い満足感を抱いていることが明らかになった。この結果は、悩みや問題を扱う形式の訓練面接ではCI版治療同盟尺度とCIが評定する面接の深さ、なめらかさ、肯定感には相関関係があるという報告⁷⁾と類似している。CI版で評価される作業同盟には、CIの満足感など面接への肯定的な認知や感情と関連があることが明らかになった。今後は両者の関係について、さらに詳細な検討を行う必要がある。

2. 基本的傾聴技法の使用頻度と第三者版、CI版、満足度との関連

本研究の第2の目的に関連して、試行カウンセリングで習熟することを求められる基本的傾聴技法の使用頻度と作業同盟及び満足度との関連を検討した。その結果、第1に、反復技法を使用する

ほど第三者版及びCI版の得点が高いことが明らかになった。反復技法にはCoが何をどのように聴き取ったのかをCIに言葉で伝え返す¹⁶⁾、CIが現在の話題についてより話せるよう励ます効果がある¹⁰⁾と言われ、試行カウンセリングではその使用が推奨される。この反復技法が、第三者版でもCI版でも作業同盟を高める重要な要因であることが示唆されたことは注目に値する。第2に、閉ざされた質問を使用するほど第三者版及びCI版の得点が低いことが明らかになった。試行カウンセリングでは、CIの自由な発言を引き出す開かれた質問は奨励されるが、CIの反応を制限する閉ざされた質問の使用は奨励されない。奨励されない技法を用いることが第三者版及びCI版の作業同盟の質の低下と関連していることが明らかになったことも重要である。第3に、いかえ技法の使用と第三者版は正の相関があるのに対して、CI版及び満足度とは負の相関があることが明らかになった。いかえ技法は、欧米のカウンセリングでは推奨されるが、わが国のカウンセリングでは推奨されない。わが国のクライアントは、自分の用いた言葉と異なる言葉がCoから返ってくると理解されていないと感じることが多い。いかえ技法と反復技法の印象評定を行った研究¹⁷⁾では、初学者は反復技法よりいかえ技法を高く評価するが、カウンセラー経験のある者は両技法を同等に評価し適切に使い分けている。これらを踏まえると、試行カウンセリングでいかえ技法が推奨されないことが改めて支持されたといえる。また、第三者版評定者のカウンセリング経験の少なさが評定結果に反映されている可能性が示唆された。第4に、感情の反映技法の使用と、第三者版、CI版の「2者間でよい絆が形成されていると感じる」項目及び全体的満足度と正の相関があることが明らかになった。試行カウンセリングでは、開かれた質問と反復技法とともに感情の反映技法の使用が推奨されているが、それを支持する結果となった。

いずれにしても、試行カウンセリングで推奨される基本的傾聴技法の使用頻度とCI版や満足度との正の相関が明らかになったことは、試行カウ

ンセリングにおける教育方針の妥当性がCIの主観的評価によって確認されたわけで重要な知見と言える。一方、傾聴技法の使用と第三者版との間に関連が見られなかったことは、第三者版の評定、とくに評定者の選定基準や評定マニュアルの問題を示唆しており、詳細な検討が必要と思われる。

3. 作業同盟評定の教育的活用案

本研究の第2の目的のため、第三者版とCI版の作業同盟質問項目得点を基に全事例を4群に分け、各群の事例を対象とする事例分析を行った。その結果、高高群の事例Aでは反復技法と感情の反映技法が平均より多かった。高低群の事例Bでは、反復技法が平均より少なかった。低高群の事例Cでは、閉ざされた質問、開かれた質問、最小限のはげまし技法が平均より多かった。低低群の事例Dでは、閉ざされた質問が平均より多く、最小限のはげまし技法、反復技法、感情の反映技法が平均より少なかった。このことから、反復技法の使用頻度が多く、閉ざされた質問の使用頻度が少ないほど、両作業同盟の質が高まる可能性が示唆された。これは、上述の量的分析を裏付けるものと考えられる。

次に、初回の第三者版の評定者コメントを手掛かりに各事例を考察した。まず、高低群の事例Bでは、「Coは試行カウンセリングの目的を理解しているが、CIは試行カウンセリングに多い話題(進路、ゼミ選択、クラブ・サークル・アルバイト先の人間関係)より深い悩みを話しているため、今後が心配である」とコメントされているが、評定者の予想通り5回終了後のCI版や満足度は低かった。CoがCIの深刻な悩みに十分対応できなかったのかもしれない。低高群の事例Cでは、「Coは懸命に話を聞こうとしているがまだ技術不足であり、CIも懸命に話をしようとしているが頻繁に話題を変えられ戸惑っている」とコメントされているが、5回終了後のCI版や満足度は高かった。これは2回以降Coが次第に傾聴技法を適切に使用するようになったためであろうし、そのためにSVが有効に機能したのかもしれない。低低群の事例Dでは、「CoはCIの発言を機械的に質

問し返そうとしている」とコメントされているが、CoやSVRの努力の甲斐なく5回終了後のCI版や満足度は低かった。本研究では、SVに関する情報がないのでこれ以上の推測はできないが、今後はCI版や満足度が低いままに終わった事例について、その理由が明らかになるよう、もっと多くの情報を収集する必要がある。

以上より、作業同盟の評定には次の教育的活用法が考えられた。第1は、CI版の作業同盟の質及び満足度の低下を防ぐ活用法である。高低群の事例Bのように、最初は第三者版で良好な作業同盟が形成されているように見えてもCIの話題によりその後の悪化が予想される場合、SVで対策を検討することで作業同盟の低下を防ぎうると考えられる。第2は、面接早期に基本的傾聴技法の学習を促進することで、CI版の作業同盟を修復する活用法である。低高群の事例Cのように最初は良好な作業同盟を築けていないように見えてもCoの学習意欲が高い場合、SVで積極的に基本的傾聴技法の指導を受けることで、CI版の作業同盟を修復しうると考えられる。第3は、CI版の作業同盟及び満足度が低いまま試行カウンセリングを終える可能性があるCoを発見し、その後の指導に生かすという活用法である。低低群の事例Dのような場合でも、反復技法、感情の反映技法の使用を促進し、閉ざされた質問の使用を控えるようSVで指導を行うことで、あらためて基本的傾聴技法の習得が促進され、作業同盟が構築できるようになると考えられる。

4. 今後の課題

本研究では、次のような限界があった。第1に、調査対象者が少なかったため、質問項目の信頼性及び妥当性が検証できなかった。今後は、より多くのCIに協力してもらうため、質問項目の削減、回答内容がCoに伝わらないことを強調するなど改善が必要である。第2に、調査対象者がA大学院生に限定されていた。結果を一般化するため、今後は他大学院生の試行カウンセリングを対象とする調査を行う必要がある。第3に、作業同盟の評定法の改善が必要である。本研究では、評定者

の負担を軽減するため、第三者評定は初回面接の前半後半合計20分間について、CI評定は最終回しか行わなかった。しかし、短期のカウンセリングではセッションを重ねるにつれて作業同盟の構造が変化すると考えられているため⁵⁾、面接経過に伴う作業同盟の特徴を明らかにするには、先行研究⁷⁾に倣い試行カウンセリング全5回を対象とする評定を行う必要がある。加えて、第三者評定の結果にはカウンセリング経験が反映される可能性が示唆されたため、今後はカウンセリング経験を積んだ臨床心理士に評定を依頼して検証する必要がある。また、本研究では負担を減らすために依頼しなかったCoにも評定の協力を依頼する必要がある。第4に、CI版作業同盟、満足度、基本的傾聴技法使用頻度のほかにも、第三者版と関連する要因として、例えばカウンセリング自己効力感尺度¹⁸⁾を参考に、Coが基本的傾聴技法を使用する自信、その習得度について検討する必要があると考えられる。

【謝辞】

試行カウンセリングにクライアントとして参加された学部生、カウンセラーとして参加された大学院生のご協力に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 小早川久美子：試行カウンセリングの手引き、広島文教女子大学、2003.
- 2) Martin DJ, Garske JP, Davis MK: Relation of the therapeutic alliance with outcome and other variable: a meta-analytic review. *J Consult Clin Psychol* 68: 438-50, 2000.
- 3) Bordin ES: The generalizability of the psychoanalytic concept of the working alliance. *Psychotherapy* 16: 252-60, 1979.
- 4) Horvath AO, Del Re AC, Flückiger C, et al: Alliance in individual psychotherapy. *Psychotherapy* 48: 9-16, 2011.
- 5) Horvath AO, Greenber LS: Development and validation of the working alliance inventory. *J Couns Psychol* 36: 223-33, 1989.

- 6) Tichenor V, Hill CE: A comparison of six measures of working alliance. *Psychotherapy* 26: 195-9, 1989.
- 7) 葛西真記子：セラピスト訓練における治療同盟、面接評価、応答意図に関する実証的研究。 *心理臨床学研究*, 24 : 87-97, 2007.
- 8) 吉見摩耶, 葛西真記子：治療同盟と面接評価に影響を及ぼすクライエント側の要因—内的作業モデルと認知反応評定を通して—。 *心理臨床学研究*, 27 : 29-39, 2009.
- 9) 吉見摩耶, 葛西真記子：治療同盟と面接評価に影響を及ぼすセラピスト側の要因—学生セラピストを対象とした内的作業モデルとクライエント反応評定を用いて—。 *教育実践学論集*, 11 : 27-37, 2011.
- 10) Ivey AE, Ivey MB, Zalaquett CP; A. E., Ivey, M. B., & Zalaquett, C. P. (2010). *International interviewing & counseling: facilitating client development in a multicultural society*, Brooks/Cole, USA, 2010.
- 11) 鎌幹八郎：試行カウンセリング, 誠信書房, 1977.
- 12) Horvath AO: An exploratory study of the working alliance: its measurement and relationship to outcome. Unpublished doctoral dissertation, University of British Columbia, Vancouver, CA, 1981.
- 13) 福原真知子, アレン・E・アイビィ, メアリ・B・アイビィ：マイクロカウンセリングの理論と実践, 風間書房, 2004.
- 14) Cecero JJ, Fenton LR, Frankforter TL, et al: Focus on the therapeutic alliance: the psychometric properties of six measures across three treatments. *Psychotherapy* 38: 1-11, 2001.
- 15) Fenton LR, Cecero JJ, Nich C, et al: Perspectives is everything: the predictive validity of six working alliance instruments. *J Psychother Pract Res* 10: 262-8, 2001
- 16) 玉瀬耕治：カウンセリング技法入門, 教育出版, 1998.
- 17) 大川未央, 兒玉憲一：二つのカウンセリング技法に対する印象評定の差異の検討—反復技法といいかえ技法—。 *日本心理臨床学会第27回大会発表論文集* : 208, 2007
- 18) 葛西真記子：カウンセリング自己効力感尺度 (Counselor Activity Self-Efficacy Scales)] 日本語版作成の試み。 *鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)*, 20 : 61-9, 2005.